〔東京家政大学研究紀要　第 61 集（1），2021，pp. 85 ～ 88 研究論文〕

母親の養育態度が SOC に与える要因と個の検討

近喰 ふじ子[†1]　梅原 碧[†2]　原田 まつ子[†3]
中本 智恵美[†4]　矢数 とも子[†5]　中込 由美[†2]

（令和 2 年 12 月 10 日査読受理日）

Factors and individual examinations of mother’s upbringing on SOC

Konjiki, Fujiko[†1]　Umehara, Midori[†2]　Harada, Matsuko[†3]
Nakamoto, Chiemi[†4]　Yasu, Tomoko[†5]　Nakagome, Yumi[†2]

(Accepted for publication 10 December, 2020)

要約
女子大学生 167 名を対象に、Antonovsky, A.の主張する首尾一貫感覚質問紙を用い、SOC を身に付けた子どもの養育とは何かを見出し、それを身に付けた子どもがどのようなパーソナリテイを持ちうるのかを検討することを目的に行った。
その結果、(Over)protection の少ない養育こそが強い SOC を育てる（co と ma のみに有意差が認められていた）ことが明らかとなった。しかし、(Over)protection のみが少なければ良いというのではなく、あくまでも Care とのバランス配分での養育が重要であり、青年期の頃までには少なくとも自己の確立（自己表明と対人積極性）を身に付けている事が明らかにされた。
さらに、30 歳代から 70 歳代までの 205 名に対し、母親から受けた養育態度が SOC に与える要因についても検討したところ、Care において co(P<.05)、ma(P<.01)、me(P<.01)に正の影響を及ぼしていた。すなわち、乳幼児期から学校教育期間までは(Over)protection が少ない養育を受け取り、社会人以降は Care の思い出に支えられて生きていけることが想定され、me は社会人教育の経験を経て、身につくものであると理解できた。

Abstract
For 167 female university students, we found out what fostering children with SOC, The purpose was to examine what kind of character the child who wore it might have. Through the upbringing of the child, the basic trust relationship with the mother is obtained, and attachment grows up. That is, by fostering less protection, the child acquires SOC (significant difference was observed only co and ma), it was presumed that to acquire the establishment of self from the complementary relationship between the mother and child (self-expressment and interpersonal aggressiveness). In addition, 205 people in their 30s and 70s were found to have a positive influence on co (P<.05),ma (P<.01)and me (P<.01) in Care. In other words, there was little (Over) protection from babies and infants period to schooling period, and it was assumed that it was possible to live supported by care's remembers received from mother after working.
キーワード：１．女子大学生　２．首尾一貫感覚　３．養育態度　４．パーソナリテイ
Key words: women’s university student’s, sense of coherence=SOC, bringing up a child, personality

1.　はじめに

Antonovsky, A.は健康生成モデルの鍵概念でもある首尾一貫感覚（Sense of Coherence；以下、SOC とする）を 1979 年に報告した。彼は自著の中で、SOC はその人に浸み渡ったダイナミックなものであり、持続する３つの確信の感覚１．把握可能感（comprehensibility；以下、co とする)、２．処理可能感（manageability；以下、ma とする）、３．有意味感（meaningfulness；以下、me とする）で表現されると述べ、上手く生きていくためには重要であると定義した[1)]。すでに、井上らはストレス対処行動と SOC の関係を検討し、me が強い者ほど問題への取り組む積極的な対処行動が、ma が弱い者ほど回避的・受動的な対処行動を取り易いことを報告した[2)]。
すなわち、成人期におけるストレス対処行動と SOC との関係が見出され、Antonovsky ,A.の考えを支持する結果が明らかにされた。
ところで、筆者らは人生の出発とも考えられる乳幼児期における養育と SOC の関係を明らかにすることこそが必要だと考えた。本田らは乳幼児期の子どもを養育する際の母親の気分の問題と SOC が関係している事を報告し、穴井らも子育ての中で生じる育児不安の多くは、母親自身の生き方の悩みなどから生じることを見出し、これらの問題を SOC から研究したところ、育児支援の理解に有用であったと報告している[3,4)]。しかし、母親のどのような養育が SOC を強くするのかについては明確には論じられていない。そこで、本研究では乳幼児期の母親の養育と SOC の関連を見出し、思春期での個の成長との関係を明らかにし、社会人経験以降には SOC はどのように変化するかをも検討した。

†1 東京家政大学大学院人間生活学総合研究科
†2 東京家政大学人文学部心理カウンセリング学科
†3 東京家政大学家政学部栄養学科：（現）杏林大学公衆衛生・衛生学教室
†4 独立行政法人 地域医療機能推進機構 埼玉メディカルセンター
†5 医療法人永慈会 一貫堂クリニック

2. 対象・方法

対象は A 女子大学の人文学部心理カウンセリング学科３年生（59 名）、家政学部栄養学科２・３年生（91 名）と短期大学部栄養学科２年生（42 名）の合計 192 名の学生であった。方法は事前に講義終了後の学生に対し、これからおこなう調査・研究を説明し、了解の得られた学生のみに、承諾書に学年と名前を記載させ、回収する事を説明した。講義終了後には以下に記載した各質問紙（PBI、SOC、対人ストレスイベント尺度改訂版、自己肯定意識尺度）を配布し、全質問紙の回答が済んだ学生から提出させた。但し、質問紙の回答の一部に不備が認められた学生が 25 名（心理カウンセリング学科 17 名、家政学部栄養学科７名、短期大学部栄養学科１名）がいたため、最終対象者は 167 名となった。ところで、我々は親の養育態度質問紙（Parental Bonding Instrument；以下、PBI とする）の施行に際し、母親を想定させることを考えたが、離婚や死別などから父親が養育者であることも想定し、その場合には「父親を思い浮かべた回答をお願いします」と伝えた。このため 25 名の学生たちの中に、質問紙の右片隅に父親に養育されたと記載し、質問紙は無回答で提出していた。そのため、最終対象者である 167 名全員が母親との関係での回答であった。以下には使用した各質問紙について記載する。

表1　SOCの構成要素とその内容

(把握可能感＝co)	自分の人生や日常生活において、自分の置かれている状況や立場が理解できるという感覚
(処理可能感=ma)	そのような状況や問題に対し、自分には有効な対処資源がある程度はあり、それを動員できるという感覚
(有意味感=me)	自分が直面する様々な問題や要求に、挑戦、受け止め、解決に向けての努力をし、そうすることには意味があり、苦労のしがいが感じられるという感覚

1)　PBI

PBI は 16 歳までの青年期前半に体験した親の養育態度（Care 因子 12 項目、(Over)protection 因子 13 項目）を成人に達した時点での子どもの記憶に従った自己記入式質問紙で、両親其々に評価できる質問紙を作成した。信頼性、妥当性での肯定的な評価や両親の養育態度に対する評価と共に、過去の実際の養育態度なども反映していると考えられる。先にも述べたように、筆者らは母親を想定させておこなったことを付け加えておく[5]。

2)　SOC

首尾一貫感覚尺度とも言われ、Antonovsky, A.が提唱した健康生成論の中核概念であり、はじめにで述べた co、ma、me の３つの構成要素から成っている質問紙である(表１）。出典；「健康の謎を解く～ストレス対処と健康保持のメカニズム～（P.221~225）」山崎喜比古・吉井清子（監訳）

3) 対人ストレスイベント尺度改訂版

橋本はストレスの多くは対人関係から生じると考え、それにはどのような種類があるかと考えて検討し、対人葛藤、対人劣等、対人摩耗の３因子を見出して作成した質問紙である[6]。

４) 自己肯定意識尺度

平石は青年期における自己を重要と考え、自己への態度の望ましさと自己の安定性に焦点をあてて作成した質問紙で、(1)自己肯定性意識尺度、(2)自己安定性尺度、(3)重要な他者から成り、今回、使用した自己肯定意識尺度には対自己領域の「自己受容」、「自己実現的態度」、「充実感」と対他者領域の「自己閉鎖性・人間不信」、「自己表明・対人的積極性」と「被評価意識・対人緊張」で構成された質問紙である[7]。

B.統計解析

統計解析は SPSSver.22.0 for windows を用い、PBI の Care 因子と（Over）Protection 因子の各々の信頼係数を算出した。Care 因子の α 係数は.887 で、（Over）Protection 因子の α 係数は.787 であった。その上で、Care 因子と（Over）Protection 因子を独立変数とし、SOC、対人ストレスイベント尺度、自己肯定意識尺度を従属変数として重回帰分析をおこなった。

C.　倫理的配慮

対象学生に今回の研究の説明をし、研究への参加は自由意志であることを伝え、協力ができる学生はこれから配布する用紙に名前、学年と学部を記載し、提出を依頼した。しかし、結果については無記名であるため、個人名が同定されないことも説明した。研究終了後はシュレッダーで処理し、破棄することを伝えた。なお、本研究は東京家政大学大学間連携共同研究費による研究で、東京家政大学大学院倫理委員会による承認を得て実施した（承認番号：板 H29-05）。

3. 結果

１．養育 PBI が SOC に与える影響

Care 因子と(Over)protection 因子を独立変数として、SOC(co、ma、me)を従属変数として重回帰分析を行ったところ、(Over)protection.が SOC の co と ma に有意な負の効果を及ぼしていた。すなわち、(Over)Protection が少ない養育が co と ma を強く育てると考えられた（表２、P<.05）。しかし、me には有意差は認められなかった（表２）。

２．乳幼児期の養育により身に付けた SOC（co、ma）から得られたパーソナリティ

Care 因子と（Over）Protection 因子を独立変数とし、対人ストレスイベント尺度の３因子、自己肯定意識尺度の８因子を従属変数として、重回帰分析を行った。前者では

(Over)Protection は対人劣等のみに有意な正の効果を及ぼし（表３、P<.01）、後者では対自己領域の３因子には有意な影響を与えていなかった（表 4）。しかし、対他者領域では(Over)Protection の少ない子育てにおいて、自己表明・対人的積極性に有意に負の効果を及ぼし（表 5、P<.05）、(Over)Protection が多くなると、自己閉鎖性・人間不信に有意な正の効果を与えていた(表５、P<.01)。

表 2　SOC を従属変数とした重回帰分析

変数	co(把握可能感) B	co B SE	co p	ma(処理可能感) B	ma B SE	ma p	me(有意味感) B	me B SE	me p
Care	0.11	0.10	0.25	0.11	0.09	0.22	0.08	0.11	0.37
Protection	-0.20	0.11	0.03*	-0.21	0.10	0.02*	-0.17	0.12	0.06
R2	0.07			0.08			0.05		
⊿R2	0.06			0.07			0.04		
p	0.00			0.00			0.01		

N=167　*p <.05

表 3　対人ストレスイベント尺度を
従属変数とした重回帰分析

変数	対人葛藤 B	対人葛藤 B SE	対人葛藤 p	対人劣等 B	対人劣等 B SE	対人劣等 p	対人摩耗 B	対人摩耗 B SE	対人摩耗 p
Care	0.15	0.07	0.13	0.01	0.08	0.92	-0.12	0.05	0.21
Protection	0.15	0.08	0.12	0.27	0.08	0.00**	0.01	0.06	0.93
R2	0.02			0.07			0.02		
⊿R2	0.01			0.06			0.00		
p	0.22			0.00			0.29		

N=167　**　p<.01

表 4　自己肯定意識尺度（対自己領域）を
従属変数とした重回帰分析

N=167

変数	自己受容 B	自己受容 B SE	自己受容 p	自己実現的態度 B	自己実現的態度 B SE	自己実現的態度 p	充実感 B	充実感 B SE	充実感 p
Care	0.10	0.03	0.28	0.13	0.08	0.18	0.13	0.08	0.18
Protection	-0.14	0.04	0.15	-0.14	0.08	0.15	-0.12	0.09	0.19
R2	0.05			0.05			0.05		
⊿R2	0.030			0.04			0.04		
p	0.03			0.02			0.02		

表 5　自己肯定意識尺度（対他者領域）を
従属変数とした重回帰分析

変数	自己閉鎖性・人間不信 B	自己閉鎖性・人間不信 B SE	自己閉鎖性・人間不信 p	自己表明・対人積極性 B	自己表明・対人積極性 B SE	自己表明・対人積極性 p	被評価意識・対人緊張 B	被評価意識・対人緊張 B SE	被評価意識・対人緊張 p
Care	0.09	0.08	0.34	-0.08	0.07	0.39	0.11	0.08	0.27
Protection	0.26	0.09	0.01*	-0.19	0.08	0.047*	0.07	0.09	0.50
R2	0.05			0.03			0.01		
⊿R2	0.04			0.01			-0.01		
p	0.02			0.13			0.54		

N=167　*p <.05

4.　考察

今回、筆者らは、(Over)protection の少ない養育こそが、強い SOC を育てることを明らかにした。

使用した PBI は、Parker, G.らが今から 40 年前の 1979 年に開発し、Br. J. Med. Psychol. に、養育の型分類 (high Care and high Protection（affectionate constraint=情愛の強制）, low Care and high Protection （affectionless control=情愛のない支配）, high Care and low Protection（optimal parenting=最適な親）, low Care and low Protection（neglectful parenting=怠慢な親）については、1983 年に Arch Gen Psychiatry にそれぞれ報告した[8]。すでに、配慮（会話・励まし・理解など愛情に満ちた配慮）と過保護の２因子構造については 1981 年の SOC Psychiatry に述べている[9]。その後、北村らが PBI を日本語版に作成する試みをおこない、著書(第２版)を出版した[5]。一方、他の親子関係質問紙を眺めてみると、2002 年には本多が「母親に対する愛着」の測定尺度を作成し[10]、その後、詫間らが成人版愛着スタイル尺度を作成し[11]、対象の相違により様々な親子関係質問紙が作成されている。このように、親の養育態度に関する質問紙は常に誰かが作成を試みている状況である。そこで筆者らは PBI は質問紙としては古いが、最も頻繁に利用されている状況から、使用することを決めた。

PBI の Care 得点と(Over)protection 得点から分類された養育の型分類のうちの一つである high Care and low Protection は、最適な親(理想の親)とされている。すなわち、Care と(Over)protection のバランスの重要性が理解できる。筆者らの結果では、(Over)protection の少ない養育を受け、強い SOC を身に付けた個では、自分のことを理解・評価でき、他者に対して積極性を発揮できると考えられた。この状況の積み重ねは me を育てる可能性が想定された。

ところで、 Antonovsky ,A.は自分の経験を理解し、しっかりとこなしていくことが強い SOC に変える用意ができたことになると述べている[1]。では、思春期までに身に付けた SOC は、成人期以降の社会人となった生き方に影響を与えるのであろうか。そこで、筆者らは 30 歳代から 70 歳代までの 205 名に対し、母親から受けた養育態度が SOC に与える要因について検討したところ、Care において co(P<.05)、ma(P<.01)、me(P<..01)に正の影響を及ぼしていることが明らかにされた（表６）[12]。すなわち、乳幼児期から学校教育期間までは(Over)protection が少なく、社会人以降は母親から受けた Care の思い出に支えられて生きていけるのであろうと想定された。Antonovsky,A.の仮説は立証されたと考えられた。しかし、20 歳代は(Over)protection が少ない方が co と ma に有意差が認められていたのに対し、30 歳代は Care が多い方が co、ma、me の全てに有意差が認められていた。（表６）親（特に、今回は母親）は娘が学業在学中であるのか、社会人でいるかの相違によって養育態度に与える影響が違うと推察された。今回の筆者らの研究からは、社会人以降の人生では、有意味感の強さが育つことが理解できた。Antonovsky,A.は、この有意味感は応答の質が一貫していることが重要とし、この関係性が有意味感に役立つ経験になると述べている。さて、古川は性格傾向と養育体験の関連を PBI から分析したところ、母親の(Over)protection の強い養育で育つと神経症傾向が強くなったと報告している[13]。このことからも、養育には(Over)protection が少ない方が強い SOC を身に付けていけるという筆者らの考えを支持することが推察された。Antonovsky, A は、乳幼児や子どもの相互作用の発達の理解として、乳幼児は両親に対して自らが接触を求めたがるものであるとの Bowlby, J, M.の説や人への安定した欲求を満たそうとするとの Boiss, M.の考えを重要な要素であると記載し[1]、それは Care と(Over)protection のバランスの重要性を支持していることでもあり、(Over)protection の少ない養育の重要性が明らかとなった。

表 6　PBI が SOC に与える影響

	co（把握可能感）						ma（処理可能感）						me（有意味感）					
	Step 1			Step 2			Step 1			Step 2			Step 1			Step 2		
変数	*B*	*B SE*	*p*	*B*	*B SE*	*p*	*B*	*B SE*	*p*	*B*	*B SE*	*p*	*B*	*B SE*	*p*	*B*	*B SE*	*p*
年齢	0.20	0.06	0.00**	0.18	0.06	0.01*	0.16	0.05	0.03*	0.13	0.05	0.06	0.08	0.06	0.28	0.06	0.06	0.41
Care				0.19	0.10	0.01*				0.22	0.09	0.00**				0.25	0.10	0.00**
Over Protection				-0.10	0.12	0.17				-0.11	0.11	0.15				0.00	0.12	0.98
R2	0.04			0.10			0.02			0.10			0.01			0.07		
⊿*R2*	0.04			0.09			0.02			0.09			0.00			0.06		
p	0.00			0.00			0.03			0.00			0.28			0.00		

5.　結論

子どもの養育に必要かつ重要な要因は(Over)protection を少なくすることであり、Care と(Over)protection のバランスの重要性を改めて考えさせられた。母親が子どもに対し、「good enough mother」であることが大切であるという Winnicott, D. W.の言葉を思い起こさせる。子どもは親との関係を過ごす中で、遊びを通じ、親の言葉や態度のふりを演じ、他者との関係性、学習や創造性を身に付けていける力が育つのであろうと改めて共感する由縁でもあった [14]。子どもは豊かな親との関係性を養育の中で認知し、理解することこそが、子どもが健康に育ち、SOC が強く育つのではないかと推察された。

本研究は東京家政大学大学間連携共同研究費によっておこなったものであり、2018 年 11 月 24 日の第 23 回日本心療内科学会総会・学術大会でポスター発表（北海道）をし、その一部を 2016 年 6 月 16 日のポスターに発表し [15]、30 歳代～70 歳代の内容は 2019 年 9 月 13 日でポスター発表した [12]。本論文は発表したものに加筆・修正をおこなったものである。なお、本論文についての利益相反に関する開示事項はないことを記載する。

6.　文献

１）　Antonovsky, A.(1987). Unraveling the mystery of health : How people manage stress and stay well. San Francisco: Jossey-Bass Publishers.

２）　井上俊哉・近喰 ふじ子・塚本尚子(2014). 一般社会人における日常ストレス対処行動と首尾一貫感覚の関連　東京家政大学研究紀要　54(1).73～78

３）　本田　光・宇座美代子(2010). 一次スクリーニングにおける SOC（首尾一貫感覚の使用可能性の検討~3 歳児を持つ親の SOC と育児に対する心理的側面との関連性より～日本看護研究学会雑誌　33(45). 101～108

４）　穴井千鶴・園田直子・津田　彰(2003).首尾一貫感覚からみた育児期女性(1)～育児不安との関連について～ 久留米大学心理学研究２ 71～76

５）　北村俊則(1995). 精神症状測定の理論と実際、評価尺度質問票、面接基準の方法論的考察 （第２版）.東京. 海鳴社

６）　橋本　剛(1997). 大学生における対人ストレスイベント分類の試み. 社会心理学研究. 13(1). 64～75

7）　平石賢二(1993). 青年期における自己意識の発達に関する研究(40). Bulletin of the School of Education. Nagoya University (Educational Psychology). 99～125

８）　Parker G. ・ Tuplin,, H. ・ Brown LB . (1979). A parental bonding instrument. Br J Med Psychol. 52. 1～10

９）　Parker, G.(1981).The measurement of pathologic parental style and relevance to psychiatric disorder. SOC psychiatry19 75～81

10）本多潤子(2002). 児童の「母親に対する愛着」測定尺度の作成　カウンセリング研究. 35(3). 246～255

11）　詫間武敏・戸田弘二(1988). 愛着理論からみた青年の対人態度―成人版愛着スタイル尺度作成の試みー. 都立大学人文学報. 196. 1～16

12）　Fujiko, Konjiki. Midori Umehara. Chiemi, Nakamoto. et. al..(2019) The frequency of SOC by age which is the concept of healthy, 25th WORLD CONGRESS OF THE INTERNATIONAL OF PSYCOSOMATIC MEDICINE 11~13 September (Italy Florence)

13）　古川壽亮(1993). 日本語版 Parental Bonding Instrument を用いた養育体験と性格傾 向と精神症状との連関の研究. 精神医学. 35(1).19～25

14）Susan Linn (2008). The Case for Make Believe, United States of America, composition by NK Graphics, A Black Dot Group Company

15）　Fujiko, Konjiki. Matsuko, Harada. Midori, Umehara. et. al..(2016) Collation of one’s feeling of health and stress, 4th annual scientific conference of the European Association for Psychosomatic Medicine 16~18 June (Lulea Sweden)